

白糠養護学校最後の校内研究のまとめを公開いたします。

ご存じのとおり、白糠養護学校は令和4年度末をもって閉校いたします。

今年度の1年間の校内研究を進めるにあたり、研究部長の先生に私からお願いしたことはただ一つ、「授業改善」です。

理由としては、本校の残り時間が1年しかないため、継続した研究ができないことと私自身が学校経営で力を入れたいことの一つが授業改善であるからです。

教員の最も必要な資質は授業力です。授業力の向上、授業改善には終わりがありません。

昨今、学習指導要領の改訂やICTの活用、令和における日本型学校教育の姿など、教員に求められる、或いは身に付けてなくてはならないものは、10年前に比べると格段に変わっていますし、増えています。

一方、医療の進歩や障害に対する知見も格段に広がり、私たちが担当する子ども達の姿や捉え方も変わってきています。10年前と同じ方法で授業できないことは明らかです。

話は変わりますが、私の教育信条の一つが「教育は生き物である」ことです。

教員は単年度勝負です。毎年担当する学級が変わることもあれば、例え、同じ学習集団を持ち上がったとしても、当初担当になったときと比べると子ども達が成長しているため、同じではないと思います。

学習集団が変われば当然我々教員の対応も変わってきます。その時代で求められる力も当然違ってくるでしょう。

「生き物」であるが故、いつも動いているし、成長するし、変わるのも当然です。だから、我々教員の対応力が求められますし、問われます。それに伴い、子どもたちを実態把握する観察力や発達に関する知識も必要でしょう。

ですから、我々教員は常に自己研鑽に励み、授業力の向上を目指し、対応力を磨かなければならないと考えます。

冒頭にも記したように、本校は今年度末で閉校になるため、全校生徒が1桁でした。

大きな学習集団での実践はできませんでしたが、代わりに生徒一人ひとりに応じた丁寧な指導を行いました。様々な力がどのようについたかを最終的には検証することになりますが、その前提として、やはり教員一人ひとりの授業力の向上がなければ検証できないと考えます。年間を通して、先生方は、時にアナログで、時に体験的な活動を取り入れながら、時にICTを操作させながら、時にオンラインを活用しながら、授業実践に取り組みました。本校は今年度、重点目標の一つにオンラインを活用した本校独自の教育課程の構築を目指しましたが、教育課程検討委員会の最終報告では、本校の授業におけるICT活用の比率は全体の50～60%までになりました。報告については、先生方の自己研鑽の賜物であり、同じことでも手を変え、品を変えることで障害のある生徒でも身に付くことは多々あると改めて実感した次第です。

日々の授業への工夫や積み重ねが、最終的には、校内研究の結果に繋がっていき、結果として仮説の検証である「何ができるようになったか」に短い期間ではありますが、迫ることができたと考えます。

白糠養護学校最後の校内研究の成果が、これを見た全ての方にとってほんの少しでもお役に立てればと思います。

校長 仲條 正輝